

## 「社会詠」のいま 谷岡亜紀

「社会詠」について、継続的に考えたいと思っている。今回はその一環である。世の中には「社会詠」という言葉にアレルギーを持つ人々がいる。私自身「社会詠」と括弧付きで記すのは、このような分別法に、どこか微妙な違和感を持っているからかも知れない。実際「社会詠」という限定的なジャンルがあるわけではない。

だが、現実を生きている以上、私たちは社会と無縁でいることはできない。スーパーに並ぶトマトだって、政治や国際経済、地球環境、貧困や労働問題と直に繋がっている。それを見ないで済ますことは簡単だが、それは、見ようとす意志と想像力がないからである。「社会詠」とは、眼前のトマトから出発しつつ少し遠くを見る視線であり、「われわれ」の時代の現実への参加の意志である。「われ」から「われわれ」への回路は、想像力さえあればどこにでも開かれる。

そのようなことを考えながら、大口玲子と吉川宏志の最新歌集を読んでみる。大口と吉川は偶然ながら同年生まれである。

- ・手をつなぎ家族で川を渡りゆく難民の写真見つめをり子は
- ・人を憎む心の翳り鮮しくアウシュビッツに雪は降りつつ
- ・わが暮らしの地続きに基地あることを辺野古の海は明らかに見しむ

大口玲子第六歌集『ザベリオ』

世にいう「難民」ではないかもしれないが大口一家も、大震災のあとに仙台から長崎、宮崎と逃れて来た。それを思う時、一首

目に描かれた息子の姿と、それを見る作者の目は切実だ。二首目は、自分の心の中に芽生えた「人を憎む心」と「アウシュビッツ」を対比し、その両者の距離を問う。三首目の「わが暮らしの地続き」との思は、大口が社会と向き合う姿勢の根幹をなすものである。自らの現場に立ち、当事者として視線を時代や社会の現実に向いている。大口にとつて、そうした社会との「窓」を開くものは、「子」の存在と信仰である。歌集の中には「決して沈黙してはならない」という「イザヤ書62章6節」の言葉が掲げられている。

大口は元々、日本語教師、自然環境への関心、東北での生活などを通して社会への視座と接点を持つて来た。その視座が、息子の誕生、大震災、移住、そしてキリスト教への信仰によって、より切実な自らの問題として意識されていったのである。対して吉川宏志は、東日本大震災を契機として、以後急速に社会への視座を、作歌の重要な契機としていったと言える。

- ・オレンジの服着せられし人の下ちいさくならぶ平凡な死は
- ・反基地の集会の間に配られしアンダーギー砂糖をこぼしつつ食ぶ

吉川宏志第八歌集『石蓮花』

一首目は「イスラム国」の報道に取材した作か。二首目は沖繩での体験である。さらに第七歌集『鳥の見しもの』より引く。

- ・見るほかに何もできない 青海に再稼働を待つ大飯原発
  - ・映さざるものは見なくてよきものか辺野古の海をテレビは映さず
- 歌集タイトルとこの二首に共通する語は「見る」である。見ることしかできないとしても、自分の目でみる。見る(≡知る)ことによつてしか全ては始まらない。そして「見る」ことが、「考える」ことの出発点である。「社会詠」とは、その考える角度と深度のことだろう。